

追 悼

Field Geologist 中澤圭二先生のご逝去を悼む

公文富士夫



中澤圭二名誉会員（京都大学名誉教授）は2019年1月17日に逝去されました。前年の年末に体調を崩されて入院し、そのまま回復にいたらず、永眠されました。享年97歳の大往生でした。中澤先生はお亡くなりになる半年ほど前に「私の生い立ち97」という冊子に自らの人生をまとめておられたので、その内容を基礎にして、地質学者・古生物学者としての先生の歩みを紹介して、追悼の意を表します。

中澤先生は1921年（大正10年）3月10日に宮城県遠田郡田尻町（現大崎市）にお生まれになった。生家は酒、みそ・醤油の醸造販売を営んでいた。お酒に強かった理由はそこにあるのかもしれない。1933年（昭和8年）に仙台第一中学校へ進み、1937年（昭和12年）に飛び級で、第二高等学校（旧制二高）へ進学された。二高ではボート部のコックスとして活躍され、インターハイで優勝されたことを自慢にされていました。スウェン・ヘッディンの「さまよえる湖」に影響を受けて、亜細亜研究会にも加わり、同級生らと2ヶ月近い北支・満州視察旅行を敢行された。

1940年（昭和15年）4月、京都の雅と海外調査の夢に惹かれて、京都大学理学部地質学鉱物学教室へ進学された。帝釈峡で進級論文を、韓国の平昌でカンプリアール

ドビス紀の朝鮮系と石炭–ペルム系の平安系を対象に卒業研究を実施された。日米開戦後の兵力増強策の一環として大学卒業が半年短縮で、野外調査も繰り上げとなり、指導教官も現地指導に来ることができない状況もあって、地質図以外は心もとない成果であったとのこと。大学卒業と同時に仙台に本部のあった工兵隊東部29部隊に乙種幹部候補生として入隊した。ボート部で鍛えた体力と精神力に加え、地質学の知識も臨機応変に活用して、軍隊生活をやり抜かれた（乙幹→軍曹→少尉）。本土決戦部隊に組み込まれたが、ポツダム宣言受諾で、敗戦を迎えた。

1945年（昭和20年）11月からは京都大学に戻り、戦後の食糧難のなか、無給の理学部副手研究員として学生生活を再開された。翌46年には理学部特別研究生に採用され、研究に専念できるようになった。全国的な炭田調査の一環としてなされた舞鶴炭田の調査に参画したことを契機として、舞鶴帯の地質調査に傾注されたという（1947～1963年）。1/5000のルートマップを作りながらの調査は先進的なものでした。当時の学生や大学院生（志岐常正、清水大吉郎、野上裕生ほかの各氏）の協力を得て、二枚貝や頭足類、フズリナ、砂岩組成などに注目した研究成果をあげ、舞鶴帯という地質帯の認識を確立された。1951年に講師に就任し、1957年には助教授に昇進された。1958年には舞鶴帯の中・下部三畳系をまとめて学位論文を取得され、1962年に教授に昇格された（地層学講座）。

1964年にアメリカ自然史博物館のDr. N. D. Newellがペルム紀最後期の公庄層から産出した二枚貝化石を見たいと地鉦教室を訪れ、ニューヨークで二枚貝の研究をしないか、と誘われた。文部省の海外研究が採択され、1965年10月から1年間、自然史博物館とコロンビア大学で日本のペルム紀二枚貝化石を再検討・総括する研究に取り組まれた。同時に、Newell博士が研究していたペルム紀／三畳紀（P/T）境界における古生物群の大量絶滅に関心をもつようになられた。帰国後には、P/T境界を含む地層が連続していて、化石も多産する地域としてテチス海域に注目され、第1次から第5次（1969年～1981年）にわたるP/T境界の海外学術調査を実施された。調査地域は、ギリシャ、トルコ、イラン、パキスタン、カシミール、インド、ビルマ、マレーシア、中国におよんだ。この研究グループに関わった日本側メンバーは、清水大吉郎、野上裕生、徳岡隆夫、能田 成、石井健一、松田哲夫、板東裕司、村雄二、坂上澄夫、村田正文、中村耕二、斎藤靖二ほかの各氏でした。現地の地質調査所や研究者との連携を重視して国際的な研究として発展させ、その成果をNakazawa and Dickins eds., 1985, “The Tethys: her Paleogeography and Paleobiogeography from Paleozoic to Mesozoic” Tokai Univ. Pressとしてまとめられた。退職

後の1986年には北極区にあたるスバルバル諸島（スピッツベルゲン島）のP/T境界の調査もされた。順序は逆になるが、1961年に京大探検部の学生の顧問として、東チモールのペルム系・三畳系の調査も行なっていたので、合計では6回の調査となる。なお、先生らの調査されたP/T境界の多くが、IUGSの下で国際層序委員会が認定するP/T境界のGSSPの候補となり、特に、カシミールのP/T境界は最後まで有力候補として残ったとのことである。

国内においては、1966年ごろから84年の京都大学退職まで、当時未詳中生層とされていた四万十帯や丹波帯の研究を行う学生・院生や若手研究者の指導に当たられ、ご自身も二枚貝や生痕化石を中心とする研究に従事された。1960年代末から、学会の民主化運動や学生運動の余波をうけ、京大地鉱教室では、講座制を崩して研究グループ制が設けられていた。中澤先生は、地角斜堆積グループを率いておられた。学生や院生の自主性を尊重した、自由な雰囲気はグループ内外での活発な議論と研究意欲を刺激し、多くの有為な人材が育成された。私もその時期に大学生活を送った。研究グループでは週に1回の長時間のセミナーと月1程度のコンパがあり、酔いに任せた議論が楽しかった思い出がある。先生は、学生には少し遠い偉い存在でもあったが、野外調査では率先して歩いて指導していただいた。また、コンパの席ではしばしば酔っぱらった先生に「さんさ時雨」を歌っていただいた。「放散虫革命」と言われた時代にも、地角斜造山論からプレート論への転換を見据えて、若手の自主性を

尊重した指導を貫かれた。私もその指導の下に、四国東部と紀伊半島の白亜紀四万十帯を修士・博士課程の研究対象としたが、砂岩組成の経年的変遷を付加体モデルで説明した学位論文を1983年に提出することができた。

中澤先生は、150編以上の著書や論文を執筆された。その傍ら、日本地質学会評議員（1959～74、79～83年）、同副会長（82～83年）、通産省鉱業審議会（石炭部会）委員（1966～71年）、東京大学海洋研究所運営審議会委員（1971～76年）、神戸市裏山土砂採取計画委員会および横尾地区開発委員会委員（1959～78年）、京都府文化財専門委員（1970～76年）、京都市青少年科学センター学術顧問（1970～2001年）、京都府埋蔵文化財調査研究センター理事（1976～2001年）、京都府環境影響評価専門委員（1988～2001年）、IPOD委員（1975～78年）、IUGS層序委員会・三畳紀小委員会などを歴任され、社会的にも大きく貢献された。1984年に京都大学を定年退職されたあと、1986年から1990年まで近畿大学教授を務められた。

なお、2019年6月15日にお世話になった弟子や関係者が京大楽友会館に集い、「中澤先生を偲ぶ会」が開催され、追悼文集も編纂・出版されました。ご夫人は3年前に他界され、旧宅に長女のご家族が住まわれています。大正生まれで、戦争の辛苦と敗戦の混乱の中から、日本の地質学・古生物学の再建を担ってこられた中澤圭二先生に対し、これまでの多大な貢献を深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

